

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
(実社会対応プログラム)

研究 成 果 報 告 書

「ケアと支え合いの文化を地域コミュニティの内部から育てる
臨床哲学の試み」

研究代表者： 浜 渦 辰 二

(大阪大学大学院文学研究科 教授)

研 究 期 間： 平成25年度～27年度

1. 研究基本情報

課題(研究領域)名	共生社会実現をめざす地域社会及び専門家の内発的活動を強化するための学術的実践
研究テーマ名	ケアと支えあいの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み
責任機関名	大阪大学
研究代表者(氏名・所属部署・役職)	浜渦辰二・文学研究科・教授
研究期間	平成25年度～平成27年度
委託費	平成25年度 2,884,000 円
	平成26年度 3,968,000 円
	平成27年度 2,284,000 円

2. 研究の目的

「共生社会実現をめざす地域社会及び専門家の内発的活動を強化するための学術的実践」のもとで、「ケアと支えあいの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み」というテーマ名で以下のような研究を提案した。

現代社会のなかで円滑な共生をめざすためには弱者を受け入れる社会基盤と精神文化の整備が必要である。また、人的および自然的な暴力や暴威が頻発する現代社会においては、心的外傷(トラウマ)やPTSD(心的外傷後ストレス障害)などをケアする態度や仕組みが不可欠である。加えて、東日本大震災が明らかにしたように、共生社会の実現のために科学技術などの専門家や専門知の在り方が問われることもある。この難題に応えるため、研究者自身が学問の体系的分業の限界をよく見極め、ともに手をとりあいながら関連する実務者と個々の具体的課題に取り組み、専門家と実務者の相互変容を目指した学術的実践により、内発的な社会基盤の強化を図る必要がある。

そうした課題に対応しながら、あるべき共生のかたちを実現するためには、当該コミュニティの社会福祉、医療・看護・介護、教育などの基盤領域において、それぞれの分野の専門家だけでなく、異なる背景をもつ者どうしが心底からの対話を実現し、ケアと支え合いの精神文化を育みつつ、内発的な仕方での問題解決にあたるのが、なにより不可欠である。公的扶助や社会保障制度の頑健性を構築することも大事であるが、そうした外部支援的施策ばかりではなく、内部から内発的に地域社会の人々自身が、問題解決する能力を高めそれぞれの生活を統御していくことこそ、確実に健全で実りある結果をもたらすと考える。

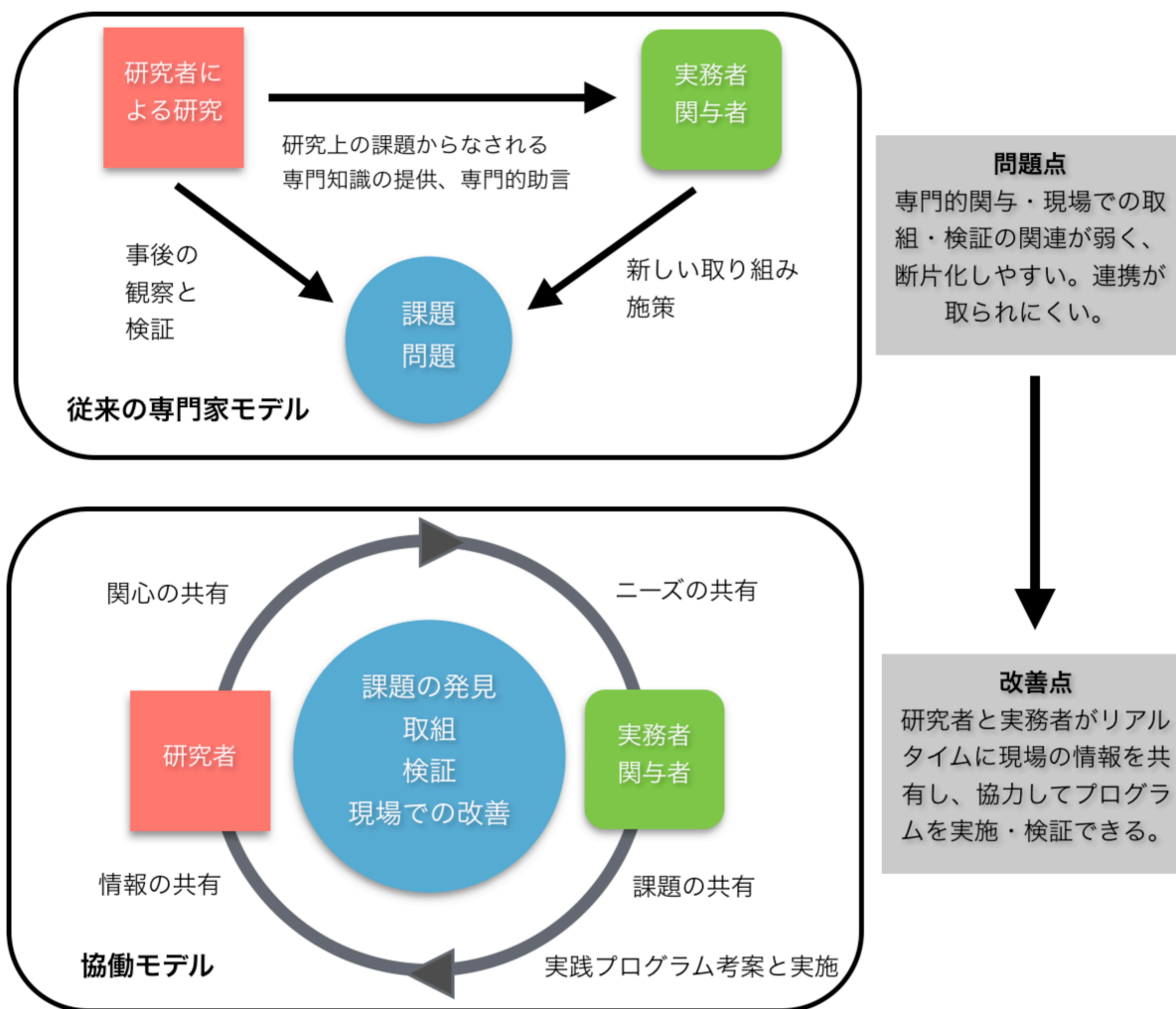
少子・高齢社会のなかでは、勝ち抜き競争型の文化ではなく、ケアと共助・互助という支え合いの文化が大切になってきた。そしてそれを育てることこそが、リスク社会に対処するための対策になることを、まずは阪神淡路大震災において、さらに東日本大震災の惨劇の経験から、私たちは学んできた。幼児期の虐待、家庭内暴力、学校でのいじめ、犯罪や事故、自然災害などを原因とする精神症状(心的外傷やPTSD)をになった人々への、心底からの配慮と支援もまた、同じケアや互助の文化を醸成することから実ると考えられる。

こうした時代背景と社会的変遷のなかで、現在、災害という非常事態のときのみならず、常時の生活に積極的に関与する実践的な研究手法とスタイルを確立する必要がある。生と知を根本で結びあわせる哲学探究を通して、研究者が心理学あるいは宗教学や芸術学、さらには社会学や政治学や教育学など人文・社会諸科学の研究者とともに地域コミュニティに関与し、コミュニティ構成員とともに学問知を鍛え直し、ケアと支え合いの文化をコミュニティ自体のなかに育て、個人とコミュニティの双方をエンパワーする臨床型プログラムを移植する。社会の痛苦の現場と学術研究の叡智の現場とを恒常的に結ぶ、そうした臨床的学術研究のしくみが確実に本国に定着することを求め、この研究課題を提案した。

従来の研究者による社会課題に対する関与は、医療にせよ教育にせよ研究者の関心に基づいて研究課題が確定され、そこから現場・実務者への処方が下ろされてきた。本研究においては研究者による専門的知識の提供

や学術的助言ではなく、現場での実践的な対話によって組織や活動の担い手である各実務者の深いニーズを聴き取り、関与者全員のセルフケアの能力を高め、コミュニティ諸活動のエンパワーメント、パフォーマンスの改善とメンテナンスを目指している（下図：モデルの転換）。哲学対話・哲学相談の活動は、従来の専門家による関与のモデルとは異なり、対話による当事者の課題の明確化や活動のエンパワーメントに役立つと考えられる。日本においてはこうした哲学相談の事例は極めて少なく、本研究では、教育、福祉、医療、多文化共生の現場において実際に哲学相談に関わる実践プログラムを試行してみることで、新たな協働モデルの提案のための研究の基礎を提供することを目的とし、具体的には、大阪大学の「臨床哲学」教室の教員と院生が中心となった「ケアと支えあいの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み」を以下のような内容と方法で行うことを提案した。

[図:モデルの転換]



3. 研究の概要(研究プロジェクトチームの体制についても記述)

本プログラム「ケアと支えあいの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み」では、以下の「ネットワーク型」と「実践プログラム型」の二つの研究を、大学院生と実務者・一般市民に開かれた対話の場を活用することで、相互補完的に展開してきた。

【研究1】「ネットワーク型研究」

以下のようなさまざまな活動を通じて、ケアと支えあいに関わる多くの人々とのネットワークを形成してきた。

- (1) 医療・看護・介護の専門職の実務者と一般市民との間を繋ぎながら、ケアを構想し向上させるケアの実践

的共同研究を遂行するため、2010年より教員と院生からなる「ケアの臨床哲学」研究会を設立し、神戸で医療・看護関係者を中心とした「患者のウェルリビングを考える会」と京都で介護・福祉関係者を中心とした「〈ケア〉を考える会」とを繋ぐ市民活動として、京都・神戸・大阪という三都市を繋ぎながら、かつ、医療・看護と介護・福祉の現場を繋ぎながら、大阪大学中之島センターにおいて定期的に年3～4回の「超高齢社会のなかで〇〇を考える」（〇〇は毎回異なるテーマ）という連続シンポジウムを開催し、関西圏で「ケアと支え合い」の文化を育んできた。

(2) 「患者のウェルリビングを考える会」（神戸、代表：藤本啓子）の活動に「ケアの臨床哲学」研究会（大阪）として共催し、講師として協力して、神戸を中心とした活動に協力した。また、同会が作成する『がんと診断されたら——がんと向き合うためのノート』（2013年12月発行）、および『ファミリー・リビングウィル——大切なあなたに伝えておきたいこと』（2014年10月発行）の編集・刊行に協力し、また、勉強会・作成会において講演などで協力した。

(3) 「〈ケア〉を考える会」の代表（林道也）が、京都から岡山に引っ越したため、京都のグループとの繋がりを残しつつ、上記連続シンポジウムの参加者や「ケアの臨床哲学」研究会のメンバーも協力しつつ、「岡山・〈ケア〉を考える会」が立ち上がり、現在まですでに25回の研究会を続けてきており、また、「岡山リビングウィル作成会」も始まり、「高齢者・障がい者権利擁護ネットワーク」など岡山の他のグループとの繋がりもできてきた。

(4) 大阪空堀地区で介護と看護を繋ぐコミュニティ・ケアを支えている「かいご・かngo塾」（代表・岩切かおり）や「高齢者外出介助の会・からほりサロン」（代表・永井佳子）が中心になって、大阪の中心地にあるコミュニティにおけるケアと支え合いの文化を育む活動に参加・協力し、第1回の「からほりケアCafé」が開催され、また、RA（青木健太）が、「からほりサロン」に集まる高齢者の食事アンケートをして結果をリーフレットにまとめたり、空堀商店街の「道勝café」で「空堀哲学カフェ」を定期的で開催するようになり、それが読売新聞でも取り上げられ、すでに30回を超えるようになり、すっかり定着してきている。ほかにも臨時で雇ったRA（栗田隆子、井藤美由紀）にも、「からほり新聞」の編集作業など、さまざまな形で「からほりサロン」の活動の援助をしていただいた。さらに研究協力者（岩切かおり）を介して「きむ医療連携クリニック」と連携しながら、地域包括ケアの充実をめざした共同研究も始まり、いまでは、この地区が、院生たちのさまざまな研究活動の拠点となってきている。

(5) 空堀地区との繋がりから「高齢期の豊かな暮らし研究会」（朝日新聞厚生文化事業団呼びかけで始まった様々な分野の実務者の集まり）にも参加するようになり、一度は浜渦が講師を務める講演会も行われ、そこでもさまざまな繋がりが広がっている。

(6) これらの繋がりから、神戸・尼崎・大阪に広がり始めたホームホスピス創設の動きとも繋がり、浜渦が講師を務める講演会が行われ、そこでもさまざまな繋がりが広がっている。

(7) 分担者・紀平知樹は、代表・浜渦が海外出張で不在の間、シンポジウムの司会を務めたほか、科研「定常型社会におけるケアとそのシステム」（代表・紀平）の活動とも関係をつけながら、神戸を中心とする研究者との繋がりを作ってくれた。

(8) 大阪大学の院生および以上の活動で協力いただいている方のうち、特に関心のある方々に参加いただき、精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組みの調査のため、平成26年度9月には北海道浦河町にある「べてるの家」を、平成27年度8月には沖縄本島・西表島・石垣島の様々な施設を訪れ、関係者にインタビューをして、報告会を行い、共著で報告書を作成した。沖縄研修には、研究協力者・永井佳子（「からほりサロン」代表）も参加し、空堀地区での認知症高齢者を地域で支える活動のための学習をしていただいた。

(9) RAの青木健太は、上記(4)のような活動のほか、京都府南部の仏教系緩和ケア施設である「あそかビハラー病院」、および大阪市大正区の人口透析クリニック「大正クムダクリニック」見学への繋がりも開拓してくれるなど、積極的な貢献をしてくれた。

(10) 大阪大学で開講している「ひろば臨床哲学」（水曜日18:15-19:45）では、学内外の研究者のみならず、社会で活躍する人たち、一般市民を迎え入れ、実社会に対応した問題関心の共有と解決への模索を行ってきた。また、大阪大学中之島で定期開催される「中之島哲学コレージュ」でも、一般市民を対象に広く門戸を開き、ミクロからマクロまでのさまざまな課題について対話する機会を設けてきた。

(11) これらの活動が評価され、平成27年1学期には、上智大学グリーンケア研究所（大阪サテライト）の人材

養成講座にて、15回の「臨床哲学」の講義を依頼されることとなり、また、日本哲学会第74回大会シンポジウム「ケア - 共に生きる」(於:上智大学)にて、高木慶子(グリーンケア研究所特任所長)とともにシンポジストを務めることとなった。

【研究2】「実践プログラム型研究」

(1) **哲学相談** (philosophical practice, philosophical consultation) とは、哲学者が個人や組織のメンバーを相手に対話を行い、さまざまな問題・課題をともに考えることを通して行動や活動の改善を目指す新しい営みであり、オランダ、イギリス、アメリカほか様々な地域において、個人の相談のほか、組織の倫理コンサルテーションなどにも応用されている。本研究ではこの哲学対話・哲学相談(コンサルテーション)を「セルフケアのケア」およびエンパワーメントの実践として捉え直し、その意義を明らかにしつつ、医療・福祉・教育などの現場において活用するために、国内外の実践例をも調査しながら、基礎となる考え方と実践法を確立する。プロジェクトチームのメンバーは2006年より地域の学校、福祉施設、病院などにおいて対話活動を続けてきた。これらの活動を哲学相談の観点から再検討し、研究者が組織や地域コミュニティのなかのさまざまな構成員・専門職とともに事業に参加しつつ、現場と人々を変革するための**実践プログラム**を展開してきた。これらの活動は、たんに専門的知識の提供や学術的助言にとどまるものではなく、実践的な対話によって組織や活動の担い手である各実務者の深いニーズを聴き取り、関与者全員のセルフケアの能力を高め、コミュニティ諸活動のエンパワーメント、個人と組織のパフォーマンスの改善、メンテナンスを目指すものであった。

(2) **Safe Community of Inquiry**をもとにした**実践プログラムの展開** 「こどものための哲学(philosophy for children:略称p4c)」は1970年代からアメリカを中心に始められ全世界に展開しつつある教育改革運動である。ハワイ大学で研究・実施されている初等中等教育現場での《Safe Community of Inquiry》の活動を継続的に調査し、ブラジルなど他の地域での実践課題と比較しながら、これを単なる教育手法ではなく、対話によるコミュニティや組織へのコミットメントとして再検討し、**哲学相談**つまり哲学者による個人および組織コンサルテーションの手法としてひろく組織コミュニティ改善を目指す実践プログラムへと拡張を試みた。また、哲学相談についての海外の動向や、米国の「こどものための哲学」や韓国・台湾の「人文治療学」の研究者と行なって来た学術交流をもとに、それらの学術的成果を国際水準で比較検討し、本事業の実践的活動に具体的な仕方でも還元してきた。

(3) 実践プログラムの展開は相談者として関わる哲学研究者の養成と表裏一体をなしている。病院、学校、障害者福祉施設、多文化共生センターの4つの組織コミュニティと協働し、若手研究者が現場で活躍するインターンシップを実施し、インターンシップを通して実務者・関係者のセルフケアとコミュニティ形成の能力向上と、プログラムそのものの改善を図ってきた。

研究プロジェクトチームの体制

分類	氏名	所属機関・部局・職(専門分野)	役割分担
研究代表者/研究1 グループリーダー	浜渦 辰二	大阪大学・大学院文学研究科・教授	研究1の調査・分析と全体の統括
分担者	藤本 啓子	患者のウェルリビングを考える会・代表/東神戸病院・緩和ケア病棟相談員	患者の側から見た医療の問題についての研究と実践
分担者	林 道也	〈ケア〉を考える会・代表/倉敷市地域包括支援センター勤務・社会福祉士	地域包括支援から見た高齢者ケアの問題についての研究と実践
分担者	岩切 かおり	大阪空堀地区「かいご・かんど塾」運営/訪問看護師	空堀地区のコミュニティ・ケアについての研究と実践
分担者	永井 佳子	高齢者外出介助の会・代表/からほりサロン運営	空堀地区のコミュニティ・ケアについての研究と実践

分担者	紀平 知樹	兵庫医療大学・共通教育センター・准教授／哲学・倫理学	ケアを支えるシステムについての研究と実践
研究2グループリーダー	本間 直樹	大阪大学・コミュニケーションデザインセンター・准教授	研究2の統括、統合モデルの作成、支援組織づくりの基礎と体系化
分担者	トーマス・ジャクソン	ハワイ大学・哲学科・教授	「こどものための哲学」調査協力
分担者	高橋 綾	大阪大学・コミュニケーションデザインセンター・特任教員	対話実践プログラムの開発
分担者	松川 絵里	大阪大学・コミュニケーションデザインセンター・特任研究員	哲学相談支援組織づくりの基礎と体系化)
分担者	森山 玲子	大阪府立長吉高校・教諭	対話実践プログラムの開発とフィードバック (多文化共生教育)
分担者	安谷屋 剛夫	沖縄県立向陽高校 (～26年度) 宮古高校 (27年度～)・教諭	対話実践プログラムの開発とフィードバック (倫理教育)
分担者	張 茜	大阪府箕面市国際交流協会・職員	対話実践プログラムの開発とフィードバック (在住外国人コミュニティ支援)
分担者	ウォルター・オマール・コーハン	リオデジャネイロ州立大学・人教育学部・教授	教育研究プログラムの実地調査協力とプログラム改善にむけた共同研究
分担者	田村 恵子	京都大学大学院医学研究科・教授・看護師	教育研究プログラムの実地調査と改善にむけた共同研究 (緩和ケア対話教育プログラム)
分担者	田中 俊英	一般社団法人office ドーナツトーク・代表	対話実践プログラムの開発 (困難をもつ人たちの居場所づくり、対話に関する研究)
研究1・2分担者	稲原 美苗	大阪大学・大学院文学研究科・助教	研究1と研究2を繋ぐ媒介役

4. 研究成果及びそれがもたらす効果

【研究1】は、何よりも、教員と院生の行う研究を、医療・看護・介護の専門職の実務者や一般市民の関心と繋ぐことによって、大学での研究を学外の実務者・一般市民に開放することで、従来の学問研究のありかたを実社会対応型に変えて行くことを試みてきた。それとともに、それぞれの専門職の実務者はそれぞれの現場での対応に追われて、他分野の実務者と単なる実務的な連携以上に問題を大きな視野のもとに考え直すような連携は困難になっており、それらの実務者相互の繋がりを作るとともに、その対話の場面に一般市民も加わってもらうことでさまざまな関心から「ケアと支え合い」の問題をともに考える機会を創出することを試みてきた。さらにまた、京都、大阪、神戸というそれぞれの地域で行われている様々な試みをお互いに情報交換し学び合うことによって、それぞれの地域の活動を狭い範囲に閉じ込めてしまうのではなく、地域コミュニティの質の向上を図るとともに、関西地域全体の「ケアと支え合い」の文化を築いて行くことにも大きく貢献することを試みてきた。地域の人々とともに行う活動には、長期的な粘り強い持続的な取り組みが必要で、わずか2年間の助成金でできることはそんなに大きくはない。その点では、この研究の延長を申請したものの、それが却下されたことは、大変残念であった。それでも、前述の(1)～(11)のような取り組みにより、大阪、京都、神戸、岡山それぞれの地区での活動とそれらを繋ぐネットワークしての活動が、この2年間の取り組みによって少しずつであれ着実に根付いてきていることを実感している。それは、まだあちこちで芽生えてきているものではあれ、これからますます大きな花を咲かせるものになることが期待できる。

【研究2】は、研究者と実践者が一体となった臨床型プログラムの確立を目指し、できあがった研究成果の地域還元という従来モデルと一線を画するアクションリサーチ型として、学問の知と現場の知が即応しつつ、その双方がたえず改善に向かうことを狙いとしてきた。

本研究においては、まず、ハワイ大学トーマス・ジャクソンによって考案・実施されている《Safe Community of

Inquiry》に着目し、実地調査と共同研究（2014年2月、2015年2月）を通して、この教育活動が、①「哲学者によるセーフなコミュニティ形成」（セルフケア、知的解放）、②「対話と探究を通じたコミュニティ諸活動のエンパワーメント」、③以上による組織パフォーマンスの改善（諸課題の自覚と解決）の3つの次元から成り立つことを明らかにした。もともと「探究のコミュニティ」は、教室のなかで考える力を育成するための新しい教授法、教育カリキュラムであった。しかしハワイ大学では近年《Philosopher in Residence (PIR)》という取り組みに着手し、教師ではなく哲学者が相談役学校を定期訪問・滞在し、学校や地域でのさまざまな営みに参与しつつ、教室だけでなく学校全体を探究のためのコミュニティに変容させていく、という実践を展開しつつある。本研究では、このPIRを学校教育の枠組みを超えて評価し、教室における授業法ではなく、哲学者の学校コミュニティにおける対話と探究による哲学相談と捉え直すことにより、これを学校現場のみならず、病院や福祉施設、地域の課題に対して実践的に取り組むための有効な実践プログラム開発に役立つことを明らかにした。また、ブラジル、リオデジャネイロ州立大学において展開されているp4cプログラムを視察し、同様の活動を識字や貧困問題解決のために応用している事例について調査を行い（2014年8月）、他地域での実践との比較も行った。

具体的な実践プログラムとして、2014年4月より、1. 病院、2. 学校、3. 障害者福祉施設、4. 多文化共生センターの4つの組織コミュニティと協力し、「対話ワークショップ」などを実施しながら、若手研究者が一定期間現場でコミュニティメンバーと協働するインターンシップを試行し、実務者・関係者のセルフケアとコミュニティ形成の能力向上を目指した《実践プログラム》を実施し、各コミュニティにおける課題の明確化と活動改善に向けた取り組みを展開した。1. 病院では看護倫理研修および患者会での対話プログラムを継続し、2. 沖縄と大阪の二つの地域においてそれぞれ課題を抱える学校に継続的に関与し、対話とセルフケアを中心とする授業プログラムを教員らとともに実施、展開している。3. 障害者福祉施設および4. 多文化共生センターでも、職員や利用者のための対話実践プログラムとともに考案し、継続発展している。いずれの実践プログラムも2016年度以後もそれぞれ若手研究者のインターンシップとともに現地で続けられていく予定である。

実践プログラム研究の成果として、《Safe Community of Inquiry》の実践は、対話による探究を通じた個人とコミュニティのセルフケアの能力を高めることに貢献できること、協働実践としての《Philosopher in Residence》の取り組みが、教育現場のみならず医療、福祉・多文化共生の現場にも応用可能であり、哲学相談によるコミュニティ諸活動のエンパワーメント、パフォーマンス向上につながることで、そして、このようなコミュニティに参加する哲学相談の実践は、モデル・カリキュラム化ではなく、各現場に応じて育て上げられる実践プログラムの事例集などによる細かなノウハウの蓄積を通して、さらなる発展が期待されること、などが明らかになった。また、病院では、医療者および看護コミュニティにおける倫理的思考能力の向上、患者コミュニティにおける関係の改善とエンパワーメント、学校では、貧困や自尊心低下など地域的問題と関連した新しい教育プログラム展開への参与、障害者福祉施設や多文化共生センターにおけるスタッフ間および施設利用者どうしの相互理解向上などが得られることが現場関与者らのフィードバックから明らかになった。

2015年度は、前年度の成果を踏まえ、PIR実施のための事例集とノウハウを共有するための哲学相談に関するジャーナル《philosophers》をオンラインで発刊し、研究者のみならず、各コミュニティのメンバーや実務担当者が随時参照し、自分たちの活動改善に向けて利用できる親しみやすい媒体作成を続けている。またこれまでの調査から、p4cや哲学相談という各地での実践が、固定されたカリキュラム、方法やマニュアルによってはけっして根付くことがなく、ハワイ、ブラジル、オーストラリアなどでの活動事例のように汎用性の高い哲学者の対話力と現場での協働作業によってそのつど作り上げられることによって成功することが明らかになっている。同様に上記の実践プログラムは、統一のモデルに基づいて実施されるものではなく、各コミュニティにおいて哲学者との協働作業を通して育成されるものであり、確立された方法論やマニュアルではなく、主として事例の豊かな記述を通じた柔軟性の高い実践者のハビトゥスの共有によって初めて実効的なものと予想される。

さらに今後の課題として次のことが明らかとなった。《Safe Community of Inquiry》の実施にあたっては、複雑な理論の習得や特殊技能は必要とされず、極めてシンプルな対話のためのツールの使い方を学ぶだけで十分である反面、効果を上げるためには習熟のために数多くの実践をこなさねばならない。しかしPIRは、大学院生および若手研究者が継続的に組織コミュニティの内部で活動しながら、現地のメンバーとともに技術を応用し習熟するプロセ

スでもあるので、「専門家モデル」とは異なる「協働による実践改善」および非研究者主導型の協働型リサーチ（アクション・リサーチ）の有効なかたちであると考えられ、さまざまなケアの現場における活動改善に応用可能であると見込まれる。そうした応用のために今後も活動事例集などの参照しやすい媒体の充実が望まれる。

哲学対話と相談による効果は、このプログラムが実施される個々のコミュニティ諸活動の①エンパワーメント、②パフォーマンスの改善、③セルフメンテナンスの力、の3つの軸において達成される。そのため、まず（ア）この臨床型プログラムに関与する研究者自身が、対話と相談の技術を習得し、現場とともに課題に対応できるための基盤となる教育プログラムを大学に整備すること、そして（イ）、地域の病院、小中高等学校、福祉施設、多文化共生施設において、セルフケア、インクルージョン、自己変容のための実践プログラムが根づくコミュニティが形成され、継続的な研究者の関わりのもとで、コミュニティ自身がこのプログラムを継続・発展させるための十分な資源を有すること、さらに（ウ）「哲学カフェ」などの対話プログラムを推進してきた「カフェフィロ（Café Philo）」などの団体とともに、大学研究者と現場実践者の中間支援を行なう組織を育成し、以上の（ア）と（イ）のサポートのためのしくみを構築することが必須である。本研究では、大学での教育プログラムの整備し、ノウハウを蓄積し、知識を提供できるための支援組織設立の準備を行った。さらに、さまざまな困難をもつ人々とそれを支援する人々、研究者のすべてが、対話と探究のコミュニティを形成し、共生社会の土壌をつくることを目指して、教育機関、実践コミュニティ、中間支援組織が連携し、持続可能な活動を展開するための基金整備が必要とされる。

【研究成果の発表状況等】

○論文等（計10件）

- ① 「「尊厳死を法制化するとは、何をすることなのか？——日本とヨーロッパ3国の比較考察——」、浜渦辰二、『メタフュニカ』第45号、1-14頁、2014年12月25日
- ② 「精神障害をもつ人々を地域で支える取り組み ——「べてるの家」訪問研修報告」、浜渦辰二、杉本光衣、菊竹智之、川崎唯史、永浜明子、稲原美苗、上久保真理子、渡辺朝美、川村敏明（共著）、『臨床哲学』Vol. 16、158-253頁、2015年3月31日
- ③ 「生老病死と共に生きる——ケアの臨床哲学にむけて——」、浜渦辰二、日本哲学会編『哲學』 No. 66、45-61頁、2015年4月1日
- ④ 「ドイツにおける事前指示書の法制化の内実——自律と依存を両立させる試み——」、浜渦辰二、『文化と哲学』第32号、2015年8月31日
- ⑤ 「ケアの「人間化のために」——淀川キリスト教病院における、対話を取り入れた臨床倫理検討会についての考察」、高橋綾、川崎唯史、本間直樹、Communication-Design, vol. 11、1-25頁、2014年8月29日
- ⑥ 「哲学相談のコミュニティ・アプローチとしてのフィロソファー・イン・レジデンス」、本間直樹、金和永、高橋綾、川崎唯史、菊竹智之、安谷屋剛夫、philosophers, 2016. 1、6-32頁、2016年1月31日
- ⑦ 「グリーフケアのために——臨床哲学からのアプローチ」、浜渦辰二、『グリーフケア』第4号、2016年3月15日
- ⑧ 「精神障害をもつ人々を地域で支える取り組み（2）——沖縄訪問研修報告」、浜渦辰二、永山亜樹、永井佳子、稲原美苗、永浜明子（共著）、『臨床哲学』Vol. 17、154-188頁、2016年3月31日
- ⑨ 「大阪府立高等学校エンパワメントスクールへのPIR導入とその課題」本間直樹、金和永、（本プログラム成果発表ウェブサイト公表 <http://www.let.osaka-u.ac.jp/clph/shakai3.html>）2016年4月30日
- ⑩ 「沖縄・宮古における〈セーフな探究のコミュニティ〉の試み」安谷屋剛夫、本間直樹（同上）2016年4月30日

○著作物

なし

○講演 (計27件)

- ① 「“リビング・ウィル”について、法制化されたドイツの事情を聞きます。」、浜渦辰二、フォア・ベルク神戸シヨールーム講演会、2014年2月1日、40名（うち研究者2名、一般38名）
- ② 「認知症とケア：北欧の研究者から見た」、講師：リサ・フォークマン・シェル（リンシヨーピン大学准教授）、通訳：浜渦辰二、「ケアの臨床哲学」研究会主催講演会、2014年2月28日、45名（うち研究者5名、一般40名）
- ③ 「脳死と植物状態」、浜渦辰二、リビングウィル作成会、2014年3月15日、30名（うち研究者1名、一般29名）
- ④ 「身近な人を葬送するために何が必要ですか?」、浜渦辰二、中之島哲学コレージュ、2014年5月28日、50名（うち研究者5名、一般45名）
- ⑤ 「二人の母を見送った体験から」、浜渦辰二、かいご・かんど塾胡桃講演会、2014年6月8日、15名（一般）
- ⑥ 「事前レクチャー：いつかくる死のことを考えておきたい」、浜渦辰二、第22回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会（神戸）、2014年6月12日、50名（うち研究者2名、一般48名）
- ⑦ 「事前指示や意思決定支援～ヨーロッパでは～」、浜渦辰二、「〈ケア〉を考える会 - 岡山」主催シンポジウム「事前指示」「リビングウィル」とは? ——人生の最終段階を考える」、川崎医療福祉大学、2014年06月14日、60名（うち研究者5名、一般55名）
- ⑧ 「ホスピスの臨床哲学 日本とヨーロッパの見聞録」、浜渦辰二、第6回ホスピス学校（山梨）、2014年7月5日、100名（一般100名）
- ⑨ 「保健医療の現場で当事者の価値に寄り添う倫理とは」、浜渦辰二、日本社会福祉会・日本医療社会福祉協会主催「保健医療分野におけるソーシャルワーク専門研修第10期スクーリング」、2014年8月30日、90名（研究者90名）
- ⑩ 「ドイツにおける事前指示書の法制化の内実——自律と依存を両立させる試み」、浜渦辰二、静岡大学哲学学会第37回大会シンポジウム「欧州における看取りと自己決定」2014年11月3日、40名（うち研究者35名、一般5名）
- ⑪ 「二人の母を見送った体験から」、浜渦辰二、高齢者ケア人材養成キャリアアップ講座（神戸学院大学）、2014年11月9日、40名（一般）
- ⑫ 「人間関係の病いとしての認知症—スウェーデンと日本の認知症ケアの比較—」、浜渦辰二、高齢者ケア人材養成キャリアアップ講座（神戸学院大学）、2014年11月9日、40名（一般）
- ⑬ 「医の倫理：言葉の不思議さ、重要性について」、浜渦辰二、第47回東洋鍼灸医学大講演会「はり・きゅうのことで知って心身を養生」（京都）、2014年11月16日、50名（研究者）
- ⑭ 「意思決定支援のあり方」、浜渦辰二、第2回高高齢者障がい者なんでも相談会総括フォーラム（岡山）、2015年3月7日、60名（研究者10名、一般50名）
- ⑮ 「尊厳死って何ですか?」、浜渦辰二、2015年度 第1回 リビングウィル勉強会、2015年4月5日、25名（一般）
- ⑯ 「さまざまなケア場面での「在宅・地域ケア」への動きから考える」、浜渦辰二、第41回日本保医療社会学会、2015年5月17日、30名（研究者20名、一般10名）
- ⑰ 「生老病死について」、浜渦辰二、2015年度 第2回 リビングウィル勉強会「腎不全になったら」、2015年6月20日
- ⑱ 「リビングウィル（どう生きるか?）について」、浜渦辰二、NPO法人風の葉・ホームホスピス推進委員会関西支部講演会、2015年7月4日、120名（研究者5名、一般115名）
- ⑲ 「コミュニケーションデザインとしての対話」、本間直樹、第59回システム制御情報学会、2015年5月22日、セッション参加者40名（うち研究者40名）
- ⑳ 「臨床哲学と対話」、本間直樹、日本ホスピス緩和ケア協会2015年次大会、2015年7月18日、700名（研究者200名、医療者500名）
- ㉑ 「生老病死について——エンディングノートとリビングウィル——」、浜渦辰二、これからの葬送を考える会九州主催平成27年度企画「安心してエンディングを実現する環境を学ぶ」第3回「ファミリー・リビングウィル～大切なあなたに伝えておきたいこと～」、2015年8月1日、40名（うち一般40名）。
- ㉒ 「地域で暮らし続けるとは／からほりモデルを考える」、浜渦辰二、第1回からほりケアCAFÉ、2015年9月12日、50名（うち研究者5名、一般45名）。

- 23 「いつかやってくる死のことを考えておきたい」、浜渦辰二、兵庫県生活創造センター公開セミナー「老い支度教室～エンディングノートを書こう～」、2015年10月3日、40名（うち研究者3名、一般37名）
- 24 「イントロ～北海道から沖縄へ」、浜渦辰二、合同研究会「精神障害を持つ人が地域で暮らすのを支える：OKINAWA / ITALIA」、2015年10月25日、40名（うち研究者30名、一般10名）
- 25 「依存と自立の対立を越えて」、浜渦辰二、「マイケアプラン研究会」第179回1月定例会、2016年1月15日、35名（うち一般35名）
- 26 「リビングウィルを法制化する必要があるのか?」、浜渦辰二、リビングウィル勉強会「リビングウィルの法制化は必要?」、2016年2月6日、70名（うち研究者10名、一般60名）
- 27 「障がいをもちながら老いることと、老いるとともに障害をもつことの間」、浜渦辰二、リビングウィル勉強会「障がいをもつこと、老いること ～障害者の自立支援と「65歳」問題(介護保険優先の規定)～」、2016年4月17日、80名（うち研究者10名、一般70名）

○シンポジウム（計9件）

- ① 「超高齢社会のなかで地域ケア力を考える」、大阪大学中之島センター、2013年11月09日、参加者50名（研究者5名、一般45名）
- ② 「地域ケア力を考えなおす～大学と地域をつなぐ～」、大阪大学中之島センター、2014年5月31日、参加者50名（研究者5名、一般45名）
- ③ 「超高齢社会のなかで葬送を考える」、大阪大学中之島センター、2014年5月31日、参加者60名（研究者5名、一般55名）
- ④ 「超高齢社会のなかで成年後見制度を考える」、大阪大学中之島センター、2014年9月13日、参加者40名（研究者5名、一般35名）
- ⑤ 「超高齢社会のなかで認知症を生きる」、大阪大学中之島センター、2015年2月28日、参加者60名（研究者5名、一般55名）
- ⑥ 「超高齢社会のなかで障害を考える」、大阪大学中之島センター、2015年5月30日、参加者50名（研究者5名、一般45名）
- ⑦ 「超高齢社会のなかで地域包括ケアを問い直す」、大阪大学中之島センター、2015年8月30日、参加者50名（研究者5名、一般45名）
- ⑧ 「超高齢社会のなかで難病支援を考える」、大阪大学中之島センター、2015年11月1日、参加者40名（研究者5名、一般43名）
- ⑨ 「超高齢社会のなかで男性介護を考える」、大阪大学中之島センター、2016年3月5日、参加者40名（研究者5名、一般35名）

○ホームページ（計5件）

- ① 実社会対応プログラム「ケアと支え合いの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み」
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/clph/shakai.html>
- ② 「ケアの臨床哲学」研究会
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~cphshama/clph-care/clph-care.htm>
- ③ 「患者のウェルリビングを考える会」
http://www.geocities.jp/well_living_cafe/
- ④ 「〈ケア〉を考える会 - 岡山」
<http://okayama-care.jimdo.com>
- ⑤ NPO法人高齢者外出介助の会・からほりサロン
<http://odekake-karahori.com/salon/>